九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

知られざる版本 : ジッドのルイス宛書簡集 (3)

吉井, 亮雄
九州大学文学部

https://hdl.handle.net/2324/19375

出版情報 : (36), pp.22-27, 1994-02-28. 青山社
バージョン :
権利関係 :

KYUSHU UNIVERSITY

知られざる版本（三）

――ジッドのルイス宛書簡集――

吉井亮雄

ビスクラでは主として韻文による作品として構想されていた『パリュード』が、ローマ到着後の遅からぬ時点で散文形式に変更されたであろうことはすでに述べた。じじつ、ベルギー人作家アルベール・モッケルに宛てられた五月初旬（一八九四年）の手紙にはすでに「散文による現代の風刺」の旨が記されている。ちなみに同じ手紙からは、それまではジッドがまだ『パリュード』だけに専念していたわけではなく、主題的にはこれと陰陽の関係をなす『地の糧』（ただし題名が定まるのは翌年）を並行して、あるいは交互に執筆していたことがうかがわれる。じっさい、後述するように、『パリュード』の執筆がすすみ、同時にその完成がなによりも先決の問題として意識されるにはさらに数か月を要するだろう。この時点では初期段階での一進一退がつづいていたようで、たとえば五月二十八日の母宛書簡（すでに一部言及）では、「たいへんに困難で苦労な仕事にとりかかっています。というのは、できたと思っていたものの半分はやりなおさなければならないからです。だが上手くいけば、すごいものになるでしょう。この作品はルアール青年に献呈します」と報告されている。

ちなみにルアールとは、現代絵画の大収集家として知られたアンリ・ルアールの三男で、ジッドがローランスを介して一年半ほど前に知りあい、以後長く深い親交をむすんだウージェーヌのことだが、この献呈者の選択はのちに、自分こそが『パリュード』を献じられると信じていたルイスの失望と反感をまねくことになる。ジッド自身は後年、『ピエール・ルイスの見たアンドレ・ジッドのデビュー』を準備中のポール・イズレールに宛てて、ルイスの願いが必ずしも理不尽なものではなかったこと、それにたいし自分のとった態度が意識的で非友好的なものであったことを認めている。とはいえ、この春から夏にかけてルイスとの関係は、けっしてジッドが述懐する

ほど悪いものではなかったようで、ドゥーセ文庫所蔵のルイス宛書簡（コピー）をすべて参照したうえでであろう、ミラン前掲書は同時期関連分を、「長い別離でその大切さを知ったジッドが友情を回復させたいと願う、熱のこもった大量の手紙」と形容している。あからさまなルイス顕揚の意図に貫かれた著書だけに、この評言はいくぶんかは差しひいて受けとるべきだろうが、少なくとも二人のあいだに強い嫌悪の感情や大きな齟齬がなかったことだけは信じてよいだろう。じっさい、同書が部分的に引用する五月二十九日付書簡では、ジッドはルイスに「ぼくはぼくの友人がすべて登場する小説を書いている。そこでは君はレオンという名だ〔前述のように結果的にはユベール〕。ぼくは君がそれをよろこんでくれるだろうと考えたんだ」と知らせているし、また六月二十四日のヴァレリー宛（現行書簡集の「七月」という推定は誤り）に、ルイスとは「この上なくよい関係にある」という記述をひろうこともできる。

六月二十三日、ジッドとローランスは、ちょうど一か月滞在したフィレンツェを離れる。それと同時に、九か月におよぶ長旅をともにしてきた二人は、この地で袂を別つ。ローランスの美術学校からの給費が尽きてきたからだが、いっぽうジッドのほうは、浪費を戒め、帰国をうながしはじめた母を説得し、彼女の許すかぎりは旅をつづけようと固く決心していた。かつてのひっこみ思案な定住者はいまやバイロンのように「情熱的」に旅することを知ったのだ。だが、つぎの目的地にジュネーヴが選ばれたのは、けっしてバイロンの思い出を追うためではない。健康上の不安がふたたび浮上してきたのである。これについては『一粒の麦もし死なずば』に以下のような簡潔な記述がある――「フィレンツェから、ぼくはまっすぐにジュネーヴにむかった。そこへぼくは、シャルル・ジッド〔ジッドの叔父で、著名な経済学者〕の友人で、トロンシャンの再来のようなアンドレア博士の診察を受けにいったのだ。じつにいい人で、名医であるばかりか、また明知の人、ぼくの命の恩人でもある。彼は、ぼくの神経だけが病気なのだから、まずシャンペルで水浴療法をし、ついで、ひと冬を山中ですごしたら、薬や養生以上の効果がありそうだとぞうさもなくぼくに信じさせた」。

このようにジッドがアンドレア博士に絶大なる信頼をよせていたことそれじたいは、たとえば三年後、イタリア旅行中に具合の悪くなった妻マドレーヌの受診のために、旅程を変更してわざわざジュネーヴまで赴いたこと、さらに彼自身も、一九〇六年半ばに極度の疲労からまったくの創作不能状態（しばしば「一九〇六年の危機」と呼ばれる）に陥ったとき、二度目の診察を請うたことなど、その後の事実からも疑問の余地はない。しかしながら診察の詳細にかんしては、これといった同時代資料が残されていないため、とりわけ第一回目の診察にかんして研究者の見解はあくまで推測の域を出ず、しかもある時期をさかいに大きく一転した。かつての代表的見解は、やはり医師であるエドゥワール・マルチネや精神医学者ジャン・ドレーらによるものだ。すなわち、まずマルチネが一九三〇年ころ、まだ

存命であったアンドレア博士に証言をもとめたうえで、自著『アンドレ・ジッド――愛と聖性』（一九三一年）において、ジッドは最初の診察で自らの同性愛的性向を告白したのだと主張した。ジッド本人はこれを否定したが（この間に博士は死去）、その後ドレー前掲書が両証言の比較にもとづき、すでに一八九四年の時点で賢明な博士が病因のひとつとしてジッドの性的抑圧を見のがしたはずはないと、基本的にはマルチネと同一の見解を提出したのである。だが今日ではこれを支持する研究者は多くない。とくにクロード・マルタンが、マルチネ著書による博士の証言は、その構成からもあきらかなように、診察にかんする内容と、のちに『コリドン』や『一粒の麦もし死なずば』から得たジッドの自伝的事実にたいする感想とに分かれることを指摘してからは、むしろこちらの主張が定説化しつつある。

ルイスとの関係に話をもどそう。つぎの書簡は、ジッドがアンドレア博士の処方にしたがい、水浴療法をうけるべくシャンペルに到着した当日ないし翌日にルイスに宛てられたものである。

★書簡5（一八九四年六月二十八日、シャンペル）

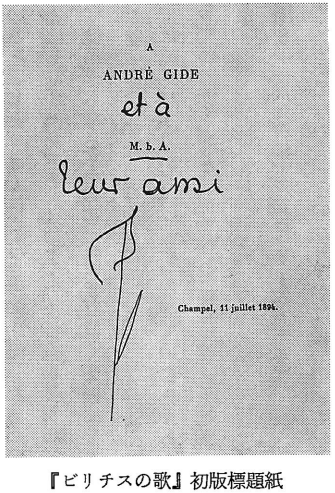
「今ぼくの唯一の情熱は君をまつことだ」。そうはじまるこの手紙でジッドは、しきりにルイスのシャンペル来訪をうながす。「寝泊まりのできる大きな馬車を借りて湖めぐりをするよりは安上がりなのだから、君はやってくるべきだ」。なによりも「ぼくが君以上に〔再会を〕まちのぞんでいるという理由だけでも、君はやってこなければならない」。

ジュネーヴは「とても美しいが腹立たしい街」だ。しかも、ぼくはそのジュネーヴにいるのでさえない、すぐ近郊だがシャンペルの水浴施設で「回復した病人」として滞在しているといった旨につづいて、「ぼくがあらかじめ木陰をみつくろっておくので、そこで読むのにどんなアイデアや草案、原稿をもってくるかは君が判断してくれたまえ」と依頼。さらに、ルイスが草稿の一部を送ってよこしていたのだろう、君の『脆弱な歌 *Chansons débilitées*』が、その題名もふくめ美妙であると述べて[1]、「ぼくは二番目の詩を暗記した。君自身がその美妙さを納得するような抑揚で朗唱してみせよう」などとつづき、最後は、ルイス用の部屋を準備するので到着日を前もって知らせよ、との追伸で終わる。

「大きな馬車を借りて湖めぐり」などとあるのは、この手紙が熱狂的なワグナー礼賛者ルイスのバイロイト行きを念頭において書かれたものだからだ。ジッドのがわからの熱い懇請は、たしかに後年の回想――「彼にはこうも長くぼくと会わずにいるのが苦痛だったし、ぼくの旅行の新鮮な土産話も聞きたかったのだ」（『一粒の麦もし死なずば』）――とはかなりニュアンスを異にするものの、そしてジッドの安否が気遣われたためもあろうが、それでもルイスのほうもこの再会に強く心ひかれたことは疑えない。七月の第二週には、共

通の友人アンドレ＝フェルディナン・エロルドをともなってシャンペルにやってくるのである。

ルイスとエロルドが再会したジッドは短期日のうちに驚くばかりに健康を回復していた。それどころか彼は二人に、ローランスとのメリアム共有のことをはじめ、北アフリカでのさまざまな冒険談を熱をこめて語り、また、かの地での感覚の解放を官能的に歌った「ザクロのロンド」[3]を読んで聞かせるのだった。ジッドの話に触発されたルイスはバイロイト詣でを急拠とりやめ、はじめの目論見では自分ひとりだけで、しかしエロルドがついて行くといってきかないので結局はしかたなく二人で[3]、地中海を渡ることになるのである。この間の事情をジッドは『一粒の麦もし死なずば』のなかで、ルイスの人物評価をまじえながら、つぎのように記している――「ピエール・ルイスはいろいろな性格上の欠点をもっていたかもしれない。たとえば、気まぐれで、癇癪もちで、機嫌買いで、一刻者だった。彼はまた、たえず他人を自分の趣味にひき入れようとし、自分の思うままに友人を動かせるつもりでいた。ただ彼には愛すべき寛大さがあった、一種ことばでは尽くしがたい血気とはやりがあって、こうした欠点を全部ひとっからげに買いもどした。彼は、ぼくらの友情にたいしても、メリアムを自分の恋人にする義務があると思いこんでしまった。そんなわけで、彼は七月の半ばにエロルドとつれだって出発した」。二人は炎暑のビスクラでメリアムと会ったのち、彼女をつれて気候の穏やかなコンスタンチーヌに家をもち、ジッドとローランスがしたような共同生活を楽しむ[4]。そしてこの体験に強く刺激されたルイスは、同地で『ビリチスの歌』を書きあげ、やがて初版出版時（タイトル頁に印刷された年号は九五年なるも、実際の出来は九四年十二月）には作品を「メリアム・ベント・アリの思い出」としてジッドに捧げるのである。もっとも、この年の末からはじまる急速な関係悪化と、それにつづくほぼ決定的な絶縁のため、ジッドへのこの献詞は第二版以降は削除されることになるのだが……。



『ビリチスの歌』初版標題紙
（ジッド宛自筆献辞入）

ジッドのほうはしばらく前から、八月にはいったんフランスに帰国し、ラ・ロックの別荘で夏をすごそうと決めていた。むろん最大の目的は、マドレーヌと再会し、その後気まずくなっていた関係を修復することにあった。そしてこの計画の邪魔になるような要素はすべて排除し、再会がうちとけた雰囲気のなかでおこなわれるように、ともにヴァカンスをすごすのは、彼女の二人の妹と、ごく親し

い友人たち――ローランス兄弟（ポールとピエール）、マルセル・ドルーアン、ウージェーヌ・ルアール――に限定するなど、入念な準備をしていたのである。それにたいし、マドレーヌとの結婚に反対の母ジュリエットは敏感に息子の意図を察し、翻意をうながしていたが、ジッドはねばり強く交渉し、結局は彼女の制止をおしきってしまう。この間の手紙によるやりとりからは、それまでの母との力関係が逆転し、北アフリカ旅行で自立と解放のよろこびを知った息子がむしろ支配的な立場につき、重要事にかんする決定権を獲得していく過程がはっきりと読みとれる。たしかにマドレーヌ当人は、ジッドの愛情をよろこびながらも、結婚にたいしてはあくまでも拒絶の姿勢をくずさず、ジッドも一時的にはこれに同意せざるをえないが、母の影響力が低下していくことの意味は小さくなく、依然曲折はあるものの、やがて彼女の死（九十五年五月三十一日）を直接の契機として、彼が数年来のぞみつづけた婚約・結婚への道をひらく端緒となった、そういってもけっして過言ではあるまい。

だが、結婚のことは話題にしないというマドレーヌとの合意がおそらくは原因であろう、ノルマンディー滞在じたいは二週間と、予定よりも短いものに終わる。ラ・ロックを離れたジッドはいったんパリの自宅（コマーユ街）におちつくが、夏の盛りに友人たちはほとんどだれもが不在である。たまたまいたレニエに『パリュードの冒頭』を読んで聞かせたのち、早くも八月二十日ころにはふたたびスイスにむけて出発する。そして途中、コワール、ローザンヌ、サン・モリッツ、コームなどに立ちよりながら、九月半ばには目的地ヌーシャテルに到着するのである。『一粒の麦もし死なずば』はこのヌーシャテル滞在を「一生のうち最も幸福なとき」とまで称揚している――「ぼくは人生にたいする希望をとりかえしていた。いまや人生が、ぼくの少年時代の臆病な気もちが考えさせたものに比べ、より豊饒な、より飽満なものに思われた。ぼくは人生が自分をまっていると感じた。ぼくはまた人生に期待した。そのくせぼくは急ごうとはしなかった。その後ぼくを苦しめるようになったあの好奇心と、欲望からなる不安な悪魔はまだぼくを悩ませてはいなかった……」。そしてこのような至福の滞在も半ばをすぎたころ、ジッドはすでに北アフリカからパリにもどっていたルイスに、つぎの書簡を送っている。

★書簡6（一八九四年十月五日、ヌーシャテル）

「かけがえのない君」という呼びかけにつづいて、ビリチスの銘句は彼女自身と同じように美妙で、また高貴なものだ。暗唱できるまでくりかえし読みつづける、と記し、残りの部分を送られたしと要請。そしてこの作品が君の無沙汰をなぐさめてくれる、なぜなら、それが君の作品であるかぎり、いかに君の私信に公の書きものにはのぞめないものがあろうとも、ぼくはやはり作品のほうを選ぶからだ。それでも仕事をしつつ手紙をよこしたまえ、とあって、自分の創作活動については、「ぼくの親友ユベール〔ルイ

ス〕はビスクラに旅立ち、ロラン〔エロルド〕が彼に同行したが、それと同じことが『パリュード』の第七章（最終章）で語られる」と述べる。つづいて、春には「あの美しいオアシス」にもどる旨ののち、追伸にヌーシャテルの感想――「だれひとり知った人間がおらず、また、なぜぼくがやってきたのか、だれもその理由を知らないこの小さな街をぼくはひどく気に入っている」。

最終章のことが話題にのぼっている点、また、じっさい決定稿の最終部分ではユベールとロランの出立が語られる点から見て、(5) 完成二か月前（脱稿は十二月五日）のこの時点ではすでに『パリュード』の全体像が固まっていたこと、とりわけ、ジッドがルイスたちのビスクラ行きを創作にとりこみ、それによって作品の結構をととのえようとしていたことはまちがいない。だが、ジッドはヌーシャテルではかならずしもこの作品だけに専念していたわけではない。ちょうど同じころドルーアンに宛てられた手紙には、『パリュード』にかんしてはむしろ逆に「まったく進まない」とあり、ノヴァーリスの翻訳、『フィロクテテス』や『プロセルピナ』『狭き門』『地の糧』など、ほかにいくつもの計画が同時進行している旨が記されている。以上を考えあわせるならば――そしてこれは『パリュード』にかぎらず、多くのジッド作品についてもあてはまる創作のパターンなのだが――、短期日の仕上げ・脱稿へとむかう前の長い準備作業がようやく最終段階にさしかかりつつある、そしてそれゆえにこそ創作は最も微妙で、最も困難な局面をむかえているのだ、そう考えてさしつかえあるまい。

（以下次号）

註

(1) 『脆弱な歌』という題名は、ルイス自身によるものか、ジッドのおふざけなのかは不明だが、いうまでもなくこのころルイスが執筆中だった『ビリチスの歌 *Les Chansons de Bilitis*』を指すことば遊び。二人の往復書簡にはこの種のことば遊びが少なくない。

(2) この少し前に書かれ、アンリ・アルベール主宰の「ル・サントール」創刊号（九六年五月）掲載をへて、『地の糧』に収められる。

(3) ただし当時のジッドの証言は一様ではなく、モッケル宛書簡には、ルイスが「親切心から」エロルドを誘ったと、またヴァレリー宛には、自分がエロルドに同行をそそのかしたと、それぞれ異なる記述あり。

(4) そのようすは、最近ニゼ書店から公刊された二冊の著書、エロルドとの共作部分をふくむルイスの『メリアムの日記』、とファティ・グラマラの『恋するアラブの人、ピエール・ルイス』によってかなり詳しく知ることができる。

(5) ただし、決定稿は「火曜日」から「日曜日」までの六日間の物語で、これを章立てと見るならば、「第七章」ではなく第六章。

*

訂正 本誌前号（第十四巻第二冊）に左記のような誤りがありました。お詫びして訂正させて頂きます。（編集部）

五二頁上段　三行目　喜びが　→　ジッドの喜びが
五三頁上段　写真説明　一八九三年八月のルイス（於ベイルート）→
一八九二年八月のルイス（於バイロイト）